

「教養」の「大衆化」をきっかけに考えたこと

広瀬 徹

語数の少ないセンテンスで人心を練ることができると思い込んでいるビジネスパーソンを大統領に選んでしまった大国のポピュリズムと反知性主義が蠢いている。そんな時代に悠長に「教養」論なんぞを語るとまなど無用であろう、というご批判もあろうかと思うのだが、幸いなことに本誌『Artes MUNDI』は創刊号において「教養」に関する鼎談を特集で組む余裕をもっていたので、スペースをお借りし、私見を述べさせていただきます。こう、という魂胆である。

しかしながら十六、七の頃、寄席演芸とジャズに浸りこみ、就職してからも「モンテイ・パイソン」の毒気にあてられっぱなし、典雅な「教養」論議は横丁のご隠居の講釈にしか聞こえてこず、会社員生活を終える資格など本来無いわけである。したがってこの駄文には、アカデミズムの世界からは受け容れがたい論点が多々含まれてであろうから、広く浅い知識を求めている半可通の贅語とお受けとめいただき、読み流していただければ、と考える次第である。

まずは記念すべき本誌創刊号に掲載された、本学教授陣四氏（高田康成・奥田隆男・大岩昌子・野谷文昭の先生方）による鼎談を振り返ってみたいと思う。そこには「教養」に関する様々な視点が提示されており、大いに触発された。その視点とは、①二〇〇二年に中央教育審議会の答申として文部科学省から発表された「新しい時代における教養教育の在

り方について」では、「教養」が何を意味するのが「今一つわからないこと」②生まれた世代、育った時代によって「教養」の捉え方が異なること③「教養」の形成に読書が大きく影響を与えること④外国語体験と「教養」とは関連があること⑤「教養」の定義と「教養」教育の変遷⑥専門主義・実用主義に抗う「教養」⑦「教養」教育の契機としての芸術⑧クラシック音楽体験と「教養」⑨食文化と「教養」⑩歴史・文化が意識されない状況での「教養」の再定義、等々である。

これだけの幅広い視点が提示されているので、それぞれの論点を深めていけば「教養」を基本的かつ歴史的に読み解くことは十分可能であろうが、私に気になるのは、ここ二十年ほどの間にこの国で起きている「教養」の普及過程である。この国に「教養」があらためて語られ始めたのは、今から二十年ほど前、阪神淡路大震災、オウム真理教事件が起こった一九九五年である。大学の公共圏における役割認識の欠落、大学専門教育の破綻がジャーナリズムにおいても言説として流布した時代である。岩波書店発行の雑誌「文学」でさえ、一九九六年秋季号で「教養の領分」という特集を組むことになる社会的な変容があったのだ。その後「教養」に関する夥しい数の論考が刊行され、現在の「一般化」「大衆化」現象にいたっている。二十年間の「教養」を巡る言説の流れを概括的に分類すると以下になるであろう。

①「教養」の新しい定義・コンセプトの提示

上記雑誌『文学』一九九六年秋季号の特集「教養の領分」に執筆している寄稿者の多くは一九三〇年代生まれの大学関係者であり、「教養」については知識重視の旧来型解釈にとどまっていた。翌年講談社から新書で阿部謹也著『「教養」とは何か』が出版され、「教養」に関する議論の出発点として評価されるようになるのである。二〇〇七年苅部直『移りゆく「教養」』が刊行されて以降、「教養」に関する定義・再定義が活発化してきている。

② 横断的学問論

特に人文科学と社会科学との領域を横断的に突破し、思考態度の变革を提唱する論考である。一九九五年以降では、内田義彦と山口昌男の二者の著作が、私にとっては印象に残っている。

③ 編集・読書に関する論考

知識を編集する編集者という立場に立脚した論考や、編集された書籍を読む読書という行動を分析する論考である。松岡正剛のビブリオグラフィ―「千夜千冊」の試みや、津野海太郎の「読書論」などが含まれる。

④ 教養主義・教養人論

明治期以降日本型知識人の「教養」を歴史的に俯瞰する論考であり、竹内洋と筒井清忠両氏の分析が代表的と言えよう。

⑤ 江戸期における「教養」論

江戸期における芸術・文化の拡がりの中に「教養」を見出していることとする試みである。江戸期のサロン形成や出版文化に焦点を合わせた論考も刊行された。江戸期文化は「諸芸」の総体であり、学問も「諸芸」の一分野として考えられていたことも記憶されるべきと考える。

⑥ 大学教育制度における「教養」論

今世紀に入ってから出版活動が活発化した領域であり、前記①「教養」に関する再定義とも関連する分野である。大学教員による著作が多い。

⑦ 大学における「教養」教育の試み

一九九四年から刊行された『知の技法』シリーズは、専門領域をなくアンソロジーという形式をとり、東京大学学内を横断的にプロデュースした作品である。「リベラルアーツ」を中心とした論考もこの分野に含めることができるであろう。

⑧ ビジネスパーソンにとっての「教養」

サラリーマン階層に焦点をあてた竹内洋氏の歴史的分析を挙げることもできるが、最近では、大学在学時代に「教養」形成を成し得なかった会社社員読者層を想定した啓蒙書が多数刊行されている。

⑨ 「教養」の一般化

『教養としての○○』というタイトルの書籍が教多く刊行され始めたのは二〇一五年である。

「教養」と名付けられても実のところは「知識」であり、「教養」と知識とを作為的に混同させることを意図しているのかもしれない。また池上彰氏のジャーナリストからタレント、大学教員へ転身する過程における「教養」情報発信、佐藤優氏の読書家としての旺盛な批評活動などにより「教養」が一般化してきている。

⑩ テレビによる「教養」の大衆化

テレビタレント爆笑問題が「一流大学」を取材したNHKテレビ番組「爆問学問」がオンエアされたのは二〇〇六年から二〇〇九年にかけてであり、大学教育の一部が世の中に曝されたのだ。各番組のタイトルが「○○力」となっているのが特徴的である。

⑪ 「教養」をタイトルとする自己啓発・エンパワーメント

「教養」を惹句とするも、実質は自己啓発であったり、あるいは一般化したエンパワーメントとなっている啓蒙書が、この分野に含まれる。

⑫ 海外「教養」番組の日本における放映

NHK・Eテレで放映された海外の教育者、実業家によるプレゼンテーションは、その技法の巧みさとともにテーマ設定のリベラルな点が評価されており、視聴者に対しても新鮮な印象を与えている。

一九九五年以降「教養」概念がこのように書籍・メディアを通して社会的に流布してきており、「教養」の一般化・大衆化が進んできている。「教養」という文字を書籍タイトルに入れば本が売れる、ということにまでなってきたのかもしれない。またICTの進展により、大学教育以外で学生が獲得する知識・情報が、多様化・深化している状況も「教養」の拡散を進行させる要因となっている。

現在メディアを通じて「教養」情報を頻繁に発信している識者の中で目立つのは、次の四氏である。大学時代も少し知識を獲得しておけばよかった、と悔いているビジネスパーソンをターゲットに再教育を目指している出口治明氏、メディア報道に欠けている部分を抉り出しテレビを駆使したジャーナリズム・マーケティングを展開している池上彰氏、「教養」を自己啓発の手立てと考えオールラウンドで「教養」を普及させている齋藤孝氏、独学・自己研鑽を武器に諸学領域を横断している佐藤優氏だ。これらの方々の執筆された書籍の帯には、「教養」という言葉を惹句として含んだコピーが並んでいる。

現在社会で進行しつつあるこれらの状況をふまえ、「教養」に関する考察は、以下のように方向づけて捉えるべき、と考えている。

ビジネス社会へ参画する前段階での「教養」教育

圧倒的多数の学生が卒業後企業社会に移動していき、ビジネスパーソンとして雇用されていく現状で、外部社会との関係で大学「教養」教育をどのように位置づけるか、という課題である。

自身の大学生時代（一九六〇年代の東京外国語大学）を振り返ってみると、幸いなことに、英米語（米文学）という専攻以外に、一年生・二年生時に経済学、経済史、経営史、社会学など社会科学領域の科目を

履修することができた。したがって人文科学と社会科学の領域を横断しようとする意志を形成する契機が、自ずとできあがっていったのである。教員の側も、領域横断発想を軸に自己の専門性を如何に有効に機能させるか、という組織的な課題を意識していたと思うのである。

しかし大学において「良識ある市民」を育成するという発想は、叛乱する学生たちによって「欺瞞」と指弾され、批判対象とされるのであるが、私自身は、大学生時代に *concern* されることは必要なことであると認識していたような気がする。そして、「教養」を社会の中できつと活かすことはできる、という曖昧ではあるが、一種のミッシェン幻想をもって大学を卒業したのである。

ところが社会人となり、毎日続く会社員生活は、「教養」の「き」の字も感じさせないものであったし、ましてや芸術・文化の香りなど全くない、「教養」という観点からは無惨としか言いようのない世界であったのである。（このように書くとは会社員生活を否定的に評価していると見られるかもしれないが、三十数年間いろいろなチャンスを与えてくれた会社には勿論感謝していることは付言しておく。）現在ビジネスパーソン向けに「教養」と名の付く書籍が数多く出版されているのは、就職後の無教養状態に起因しているのかもしれない。

時代は逆方向に走っており、大学と外部企業社会との協働作業である、今流行りの産学連携をも「教養」の枠内で捉えようとする動きもある。これは、社会に関する知識を獲得する、という実用主義の考え方に沿い、産業社会への「動員」を図るプロジェクトと考えるべきである。連携による外部社会での体験ではなく、むしろ外部社会とは切り離されたところで、ビジネスパーソンとしての生き方を社会の全体性との関連で考察する習慣を学生に身につけさせるのが、大学の役割のように思えるのである。

その際「教養」を自己啓発とかエンパワーメントに短絡的に連結しないようにすることが肝要であろう。エンパワーメントという「〇〇力」養成ではなく、芸術文化経験とビジネス経験との緊張関係をも視野に入れた

「教養」形成も教育課程に含まれるべきである。実際のカリキュラム構成は甚だ難しいこととなるであろうが、取り組むべき課題と考えている。

「教養」の基盤形成と「教養」の定義

苅部直氏の著書『移りゆく「教養」』に、知の働きとは「知恵」「賢慮」「判断力」で構成されることが示されているが、知の働きを促すエモーショナルな側面も見逃せないと思う。非言語経験あるいは身体経験を基盤とする瞬間的な感応体験である。Empathyとはこのことを指すのであろう。

特に現代の学生は、初等中等教育段階での芸術文化経験が脆弱である。未就学段階で「お稽古ごと」（楽器・書道・舞踊など）を習うも、小中学校でスポーツ（野球・サッカーなど）に転向し、高校入学時にはスポーツに見切りをつけ、バンドなどを趣味としたり、あるいは受験勉強にまっしぐらに進むという傾向が顕著である。大学では学生の「教養」基盤形成に欠落している芸術文化要素を補うことが必要であると考える。

また大学卒業後、前記のような会社員生活の中で、自らの精神的根柢とするところは奈辺にありや、という疑問は必ず湧いてくるのであるが、私の場合幸運にも能楽・謡という伝統芸能分野に出会うことができ、謡を「余技」として生活の中に取り入れることができたのである。そのことにより芸術・文化と生活との関係も「教養」の重要な部分であることを明確に意識し始めるようになった。つまり「教養」とは、「学問あるいは社会生活によって形成される「知」と歴史・伝統に裏打ちされた「芸術」との関係を意識させる契機」と定義できるようなったのである。したがって「教養」は体系化や制度化には馴染まない、瞬間的に生起する ephemeral な非定常なものとして捉えている。

大学教育に携わり始めてからまだ十年強ではあるが、「教養」という領域、その形成過程や概念拡張に関してはずっと関心をもってきた。「教

養」を教育の一環として考察対象にし始めたのは、十一年前南山大学専門職大学院（ビジネススクール）に奉職し、講義科目「文化メセナ」を担当してからである。この「文化メセナ」という甚だ曖昧なタイトルは急務で当時の学科長が付けたものだが、私なりに解釈し、芸術文化と経済との関係や芸術文化に対する個人・制度の支援をテーマとすることにした。その中で明治期以降日本での富豪による芸術文化パトロネージを解説するところを行ったのであるが、その過程で会社に属する普通の「会社員」が芸術文化とどのような関わりを持ってきたのか、あるいは「教養」をどのように身につけてきたのか、という課題を意識するようになったのである。「会社員」でありながら芸術文化に深く関わった人々を探り始めたのだ。

その中で発見したのが、初山梓月（一八七八～一九五八）という人である。会社員という「生業」に絶えることなく携わりながら、「余技」としての俳句の句作を続け、茶道・能楽など十五種に及ぶ「趣味」を楽しんだ、三木清によって強烈に批判されるであろう「ディレッタント」である。「教養」と「ディレッタントイズム」との関係を探きはぐしていくことが、本稿をふまえた私にとっての次の課題となるであろう。